

少い地域に栽培され得る。地形的には平地よりも、幾分傾斜のある地が望ましい。また圃地の排水が良好な事が必要条件とされる。極端な土壌条件を除いてどのような土壌でも栽培可能であるが、たばこの品質、収穫に好影響を与えるには、A層（容脱層）の厚さは20～25mでよく耕耘され、固粒化していることである。農家経済の面からみると、たばこは他の作物に比して妥当収益が大きい。一方、一日当家族労働報酬は非常に低い。しかしたばこ栽培の利益は、相対的妥当粗収額が大きい事にある。為にいかにつらい労働をしてもたばこをやることになる。また専売制の下では、価格が安定しているので当地域の農家経営の中では主作物として機能している。しかし最近では青年層の中に、たばこに対する収益観念が変つてきた。従来重んじられてきた妥当粗収益よりも、労働報酬としての収益が有利かどうかを考えるようになってきた。そのような観念から、蔬菜、養畜等の経営部門とたばこ作物との収益を比較してみる時、たばこは決して有利な作物でない事がわかり、たばこ絶対視への偏見を打破する動きがみられる。その結果最近では農家経営、作物等にも変化がみられたばこ作に費す労力を養畜部門へ振り向けようとし、新作物として、果樹、蔬菜を導入しようとする動きがみられる。

武蔵野台地頂部付近の地誌学的研究

岡崎 セツ子

地理学科に学ぶようになって一年程過つた頃から、卒業論文には「地理」にだけしかできないようなもの（地誌か？）をやりたいと考えていたが、丁度地理教室の方針が狭い地域の地誌ということになつたので、結局これを論題にすることになつた。

フィールドとしては武蔵野台地肩頂部を選んだ。これは地形的にある程度まとまりがあることと色々な地形が存在していること及び自宅から近距離ののところであることなどによる。

フィールドは多摩川が関東山地から関東平野に出るところである。ここには古くから青梅の町が発達し、又江戸と甲州を結ぶ街道がここを通るため一時町はかなり繁栄したといつところである。そして多摩川の流れを利用して染色、機業が農家の副業として発達してきたところでもある。

この地域の特徴を幾つかひろつてみると大体次のようになる。

1. 肩頂部としての特徴：地形的には丘陵と台地と広い河岸段丘がその主なものである。交通路や集落の配置は肩頂の町を中心として扇端に向つて開いた

形をとっている。地下水は地質構造の関係から、東方にゆるく傾斜している。その上台地上は流入河川がなく農業は畑作が主となっている。

2. 各地形面と土地利用との関係における特徴。地形分類を大ざっぱにみた場合には地形面と土地利用との関係は非常に明瞭である。即ち丘陵では林地が圧倒的に多くを占め、山麓緩斜面では畑地と集落が卓越している。台地では畑地が3分の2を占め、平地林が幾分残っているために林地が5~6分の1ほどあり集落は少い。河岸緩丘上では畑地が16%~40%を占め、次に集落が多くなっている。河岸緩丘は多摩川の兩岸に数段あるがその高さや又南岸にあるか北岸にあるかによつても土地利用にはその特徴が認められる。

以上がこの地域の地誌学的考察の結果であるが、この他に関東ロームについて少し調べてみた。この地域の台地は立川面と連続する面であるから立川ロームが被覆しているのが当然と考えられるのであるが、青梅付近でロームが被覆していない地帯があるということを示し先生が教えて下さった。そこでこの付近一帯にはロームはないのかもしれないという想定の下にロームを求めてフィールドを歩き出した。ところが1.5mのボーリングの結果は台地上の畑にも又その北方は、加治丘陵までロームは認められたのである。即ちボーリングや露頭観察、下水工事その他の工事等によつて地下の状態が幾らかでもみられるところでの観察などの結果から次のようなことが判つた。

- ① 台地（立川面）のロームは北に厚く南に薄くなる。
- ② その厚さは最厚2m程度であろう。
- ③ ロームは立川面の大部分に分布しているが台地の西~南縁部の一段低い部分には全く存在していない。

次にこれらの原因を考えた。この地域一帯にロームがうすいのは、火山灰起源の火山からの距離が遠く、その間に存在する山地によつて、火山灰が運ばれてくる量が減少する為であろう。又、南方に薄くなるのは、この地域の南にある大荷田丘陵が火山灰降下の障害となつていること及び台地の一段ひくい部分にロームがないのはもつと局部的な原因によるものであろう。

金川扇状地における自然地理学的考察及び果樹園化について

金子晶子

1. 研究の目的

従来扇状地は平野の一部として考えられ、その研究も平野研究の一端としての位置にあり、扇状地の平面的状態を論ずる地形学的研究であつた。しか